

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たちの多くは自分のまなざしが固定化しているとは思っていない。

自分は人と比べて柔軟な視点を持っており、頑固なまなざしを持っているのは相手だと思っている。自分は他者の意見を受け入れ、その違いにも寛容で、自由に発想を変えられると信じている。だから普段、私たちは自分の見方を変えたいと思っていない。

A 柔軟でない相手や融通の利かない物事を変えたいと思っている。

¹ 私たちが見方を変えるのは、自分にとって都合の悪いことが起こったときだ。社会や他者や物事との関係の中で自分にとって不都合な状況が生じたときに、私たちはそれを何とか切り抜けるために見方を変えようとする。アイデアに行き詰まったとき、人間関係がうまくいかないとき、日々の生活で困ったことが生じたとき。そしてその物事がどうにも変えられないとき、経験や知識の範囲で私たちは見方を変えようとする。だがその場合に私たちが変えるのは自分自身への認識ではなく、表面的な物事の解釈であることが多い。

物事の解釈を変えることも見方を変えることではあるのだが、それは自分の欲求に合わせて都合よく見方を変える場合が多い。そこでの見方を方向づける欲求そのものは自分の深い部分で固定化しており、それには気づかない。私たちは物事の解釈を変更することで、日常の問題であれば何とか乗り切れるかもしれない。だが、深刻な事態が起こったとき

には、それだけではうまくいなくなる。生死にまつわるようなこと、自分のアイデンティティの危機、混乱した状況や先行きの全く見えない社会不安。そんな場合に私たちは根本的な見方を変える必要性に迫られる。

そもそも、見方を変えるのはそう簡単なことではない。これまで長い時間をかけて培ってきた自分の根幹に関わることほど、見方を急に変えるのは難しい。それにはとてもエネルギーと努力が必要になるのだ。特に社会に大きな変化が訪れるときや、答えのない深刻な問いが自分に突きつけられ、根本から見方を変えねばならない状況になるほど、私たちはこれまで以上にますます自分のまなざしを固定しがちだ。自分の見方が間違っていると改めるよりも、自分の見方は間違っていないことを確認する方向に物事の解釈を変更する方が私たちに容易い。

しかし、何とかしてようやく自分の認識を変えることができたとしても、また次から次へと深刻な事態が続くような状況に陥るとどうだろうか。今度は、私たちは自ら進んでまなざしを固定化することを選ぶのである。答えが定まらない不安定な状態は、私たちに大きな苦痛を強いる。その不安の激流に流されてしまわないように、何か答えを決めてそこから動きたくない気持ちが強まるのだ。だから状況が厳しくなるほど、自分の都合の悪いものは視界から追いやって、自分が見たい部分や一度信じたことにだけ目を向けがちになる。そんな状態を繰り返しているうちに、² 私たちのまなざしはもう変えられないほど固定化してしまう。

こうして一度信じ込んでしまうと、その物事の別の側面を見せられても、私たちにはそれが事実には見えない。いくら妥当性がある理屈が並べられても、自分の信念に合わないものを間違っているとする方が、私たちには容易い。自分の見方を正当化してくれる情報や理屈、権威を追い求めるようになると、それがまた自分の見方をますます強めていく。

B 次第に自分と反対の見解や立場を突きつける相手を敵視したり、見下したりする態度を示すようになる。

小さい頃から教育されてきた知識、長年にわたって社会で信じられてきた概念、多くの人が口にする情報。それらは繰り返し唱えられるものほど私たちの中に強く刻まれ、それはいつしか自分自身の信念や考え、感覚として自分の無意識に深く入り込んでいく。自らが固く信じて疑わない見方、つまり私たちのまなざしが固定化した状態は「固定観念」あるいは「偏見」と言い換えられる。それが社会にまで広がったものを、私たちは「常識」と呼ぶ。だが、^(注)アインシュタインも常識とは十八歳までに身につけた偏見のコレクションと指摘したと言われるように、常識とはまなざしが固定化したものにほかならない。

³ そんな常識を前提にして、社会ではさまざまなことが動いている。政府の政策、経済の変動、科学の通説、それにもとづいた産業、そして日々の生活。それらはそれぞれ個人の信念だけでなく多くの人々の常識と利害が関係している。だからこれまでの常識とされることが根本的に覆^{くつがえ}されることが起こると、それに抵抗する力はより大きくなる。

何か前提を変えてしまうような世紀の発見があったり、根本から産業構造を覆す新しい発明が起こったようなときでも同様である。それによってこれまでの常識のもとで積み上げてきた莫大^{ばくだい}な利益が失われるのであれば、社会は保守的な態度をとるだろう。全ての常識やシステム、教科書や方程式を根本からつくりかえねばならないのであれば、総力を上げてそれをなかったことにしようとするかもしれない。

⁴ 危機に際しても同じことが言える。世界的な危機や混乱を生み出す前提が、もし何らかの理由で間違っており、それが次の常識を生み出してしまったとすれば。その前提をつくることに関与し積極^{ふいちょう}的に吹聴してきた人々、例えば専門家や権威、政治家や企業などにとっては、とても都合なことになる。あるいはその常識にもとづいて社会的に拳を振り上げ、声高に正当性を主張していた人々は拳を下ろす先を失ってしまう。だからもし自分の主張が間違っていたことに気づいたとしても、これまで前提にしてきた見方を変えるにはとても勇気が必要になる。

それに社会がその者たちに責任を負わせようとするほど、素直^{わいきよく}に見方を変えるどころか都合の悪い事実が表に出ることを隠蔽し、歪曲^{わいきよく}し、演出しようとするだろう。あるいは、反感を寄せる社会のほとぼりが冷めるのを待ち、これまでの責任を回避しようとするかもしれない。いずれにせよ、自らの常識を根本的に変えるよりも、物事や出来事、事実の解釈を変えることを選択しがちである。

だから混乱が大きくなればなるほど、⁵ 社会では次の常識を巡る「まな

「ざしの戦い」が始まる。そこには、さまざまな力が巧みに私たちのまなざしをデザインしようと仕掛けており、どの見方もそれらしく見えるように^(注)プレゼンテーションされる。そんな観点からインターネットを注意深く眺めると、多様な見方が並べられていることに気づくだろう。

その中には科学的でないものも溢^{あふ}れているし、客観性を装^{よそお}いながら根拠のなさそうなものもたくさん見られる。しかし私たちがこれまで当たり前としてきた社会の仕組みや科学的な常識を覆すような情報や証拠も共有され始めているのだ。それらの全てが妥当性を欠いた説明であるとは必ずしも言い切れないように思える。一方で、あまりにもたくさんさんの情報に溢れ、そのどれもが正反対を主張する中、今や何が事実で何が正解なのかの判断は簡単には下せなくなっている。そんなときこそ、改めてもう一度、「常識とは何か」について確認する必要があるだろう。

常識とは何かを改めて考えることは日常の中でそれほど多くはない。人は誰しも自分の常識は正しいと思っている。そして他の人々も自分と同じような常識を持ち、同時に自分も他の多くの人と同じように常識を備えていると考えてしまう。だが私たちが考えている以上に常識とは曖昧で実体のないものである。

(ハナムラ チカヒロ 「まなざしの革命」から)

一部表記を改めたところがある。

(注) アイデンティティ^{II}他と区別する自分らしさ。

アインシュタイン^{II}ドイツ生まれの理論物理学者(一八七九～一九五五)。

プレゼンテーション^{II}提示すること。

問 1 本文中の **A**・**B** に入れる語の組み合わせとして最も適す

るものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|
| 1 | A | 例えば | B | ただし |
| 2 | A | しかし | B | または |
| 3 | A | むしろ | B | そして |
| 4 | A | やはり | B | つまり |

問 2 本文中の……線Ⅰの語と同じ熟語の構成になっている語を、次の

中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 携帯 | 2 | 名言 | 3 | 送迎 | 4 | 尽力 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|

問 3 本文中の……線Ⅱの「よう」と同じ意味で用いられている「よう」

を含む文を、次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | |
|---|------------------|
| 1 | 妹はすでに出かけたようだ。 |
| 2 | 明日は早く起きようと思っている。 |
| 3 | 週末は一緒に映画を見ようよ。 |
| 4 | 雨が滝のように降っている。 |

問4 ――線1「私たちが見方を変えるのは、自分にとって都合の悪い

ことが起こったときだ。」とあるが、そのことについて筆者はどのような考えを述べているか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 不都合なことが起きた場合には、自身の個人的な欲求で都合よく物事を捉えるのではなく、世間において大多数の人が持っている認識に従おうとする傾向が強い。

2 都合の悪いことが生じたときには、自身の認識にこだわるのではなく、他者の意見や新しい知識を積極的に取り入れることで発想の転換をしようとする傾向が強い。

3 不都合なことが生じたときには、新たな見識を身につけて自身の認識を変えるのではなく、直面している物事を自身が受け止められるように捉え直す場合が多い。

4 都合の悪いことが起きた場合には、自身が長い時間をかけて身につけた認識を改めるのではなく、問題を生じさせている相手に意見を変えるよう求めることが多い。

問5 ――線2「私たちのまなざしはもう変えられないほど固定化して

しまう。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 深刻な事態の連続を解消するために新たな答えをつくり出すことが求められる中で、失敗を恐れるあまり一度成功した解決法にこだわってしまい、別の見方ができなくなっていくということ。

2 深刻な事態の連続で答えが定まらない状況から逃れようとして、自身にとって都合のいい側面だけに注目することを繰り返すうちに、自身の見方を改めることができなくなっていくということ。

3 深刻な事態が続いて誰も対応できないという状況に陥ると、自身の信念を揺るぎないものにして社会に貢献しなければならないという使命感が働いて、見方が動かさなくなっていくということ。

4 深刻な事態が続いて他人を信用することができなくなり、自分以外に頼れる人はいないという意識が強まった結果、徐々に自身の見方を絶対的なものとして捉えるようになっていくということ。

問6 ―線3「そんな常識」とあるが、それを説明したものとして最

も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 一度も教わったことがないにもかかわらず、全ての人間が生まれつき持っている同じような考え。

2 さまざまな時代を経て受け継がれていく中で、人々が何度も正確性を検証してでき上がったもの。

3 幼い頃から多くの人と触れ合い多様な経験をすることによって身につく、人によって異なる考え。

4 無意識のうちに自身の考えのもとになっている、長い間人々の共通認識として扱われてきたもの。

問7 ―線4「危機に際しても同じことが言える。」とあるが、それを

説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 危機の前提となっている常識が覆りそうになると、常識を根拠に正当性を主張していた人々が政治家の責任を追及しようとするかもしれないということ。

2 危機の前提となっている常識が根本から変わりそうになると、新たな発見や発明をすることで常識を守ろうとする人が出てくるかもしれないということ。

3 危機の前提となっている常識が覆りそうになると、常識が変わることによって不利益を被る人々が都合な事実を隠そうとするかもしれないということ。

4 危機の前提となっている常識が根本から変わりそうになると、常識をもとに進められてきた政策に社会全体が関心を示さなくなるかもしれないということ。

問 8 ———線 5「社会では次の常識を巡る『まなざしの戦い』が始まる。」

とあるが、「まなざしの戦い」に関して筆者はどのような考えを述べているか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 物事の解釈に影響を及ぼすような情報が提示され、中には常識を覆すようなものもあるが、異なる主張にもとづいた膨大な数の情報が入り乱れているため、適切な選択をするのは困難である。

2 物事の解釈を揺るがそうとしてさまざまな情報が示されるが、中には根拠のないようなものも混じっているため、専門的な知識を駆使して検証しない限り、正解を探し出すのは困難である。

3 物事の解釈に影響を与えることを目的として情報が提示されるが、常識が通用しないような情報も存在しているため、複数の観点から捉え直さない限り、妥当性を判断するのは困難である。

4 物事の解釈を揺るがすような情報が提示され、多くの情報がそれらしく見えるようにつくられてはいるが、実体は非科学的で根拠のないものであるため、正確なものを選ぶのは困難である。

問 9 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 常識と見方が強く結びついていることを指摘するとともに、社会で常識が果たす役割について確認し、見方を変化させるためには常識を活用することが有効だと論じている。

2 見方の固定化が起こる経緯を述べた上で常識について説明し、多様な見方が生み出されている現代において、常識に対する自身の見方を振り返ることの必要性を論じている。

3 社会に影響を与えている見方が常識によって固定化されたものであることを明らかにし、見方を変化させることの利点を説明しながら、情報発信の際の留意点も論じている。

4 見方と解釈の違いを明確にしながら長年社会で常識とされてきた見方に疑問を投げかけ、常識にとらわれず、自身の見方を強固なものにしていくことが重要だと論じている。

問 9	問 8	問 7	問 6	問 5	問 4	問 3	問 2	問 1
①	①	①	①	①	①	①	①	①
②	②	②	②	②	②	②	②	②
③	③	③	③	③	③	③	③	③
④	④	④	④	④	④	④	④	④

問 9	問 8	問 7	問 6	問 5	問 4	問 3	問 2	問 1
2	1	3	4	2	3	2	1	3

~~~~~

問1

空欄の前後の内容を捉える。空欄Aの前では、自分は「柔軟な視点を持つ」ち「自分の見方を変えたいと思っていない」とあり、あとでは、それよりも柔軟な視点を持たない人を「変えたいと思っていない」という内容なので、「むしろ」が入る。空欄Bの前では、自分の見方を正当化するものを追い求めると自分の見方が強くなり、あとでは、その結果自分と対立する見方をする人を敵視などするようにするという内容なので、「そして」が入る。よって3が適切。

問3

**ポイント** 波線部Ⅱの「よう」は、意志を意味する助動詞である。

これと同じ意味の助動詞を含むものは2の「起きよう」である。1の「よう」は推定の意味の助動詞「ようだ」の一部。3の「よう」は、勧誘の意味の助動詞。4の「よう」は、たとえの意味の助動詞「ようだ」の連用形の一部。

問4 傍線部1の状況で私たちがとる態度については、同段落と次の段落で説明されている。ここでは「自分にとって不都合な状況が生じたとき」は、切り抜けるために「見方を変えようとする」。しかし、「変える」のは、自分自身への認識ではなく、「自分の欲求に合わせて都合よく見方を変える（＝物事の解釈を変更する）」だけだと述べられている。つまり、自分に都合の良いように捉え直すということなので、3が適切。

問7

「同じこと」が何を指すのかを捉える。前々段落では、社会のさまざまなことは「常識と利害が関係」しており、それまでの常識が覆されるようなことが起こると、それに抵抗する力が大きくなると述べられている。そして、前段落では、常識が覆されるような発見、発明があった場合、社会は「それをなかったことにしようとするかもしれない」と述べられている。それまでの前提をつくることに関与してきた人々にとっては不都合なことになるため、危機の場面であっても同様に、前提が間違っていたとしても、「それをなかったことにしよう」とするということで、3が適切。

問9

選択肢の内容に着目すると、筆者の主張に関連するものであると判断できる。筆者の主張は最後から二段落目に述べられている。常識を覆すような情報等や多様な見方があふれる現代では、『常識とは何か』について確認する必要がある」と主張している。この主張を踏まえ、本文の構成に目をやると、まずは、見方が固定化する経緯、そして常識について説明し、筆者の主張へとつなげている。よって2が適切。